

30. また言われた。「神の国は、どのようなものと言えよいでしょう。何にたとえたらよいでしょう。」

31. それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときには、地に蒔かれる種の中で、一番小さいのですが、

32. それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」

## 説教

イエスさまは、「神の国」を説明するのに、いくつかのたとえをお話になりました。ここでは「からし種」にたとえます。

イエスさまは言われます。「神の国は、どのようなものと言えよいでしょう。何にたとえたらよいでしょう。」(30)「神の国はこうです」と説明するのが最も単純な言い方です。でも、その前に、「神の国は何と同じか。どんなたとえにたとえるか。」(30 節直訳)と言われます。「神の国」はあくまで「神の国」で、地上にあるもので説明するのは本来は難しいのですが、それでも、できるだけ聞いている弟子たちにもわかるよう、イエスさまは「たとえ」を用います。そして、「神の国は何と同じか、どんなたとえにたとえるか」と熟慮し、よく考えた上で、こう言われるのです。「それはからし種のようなものです。」(31 節前半)

「からし種」は本当に小さい種です。31 節後半には「地に蒔かれる時には、地に蒔かれる種の中で、一番小さい」とあります。その通りで、大きさは直径約 1mm、重さは約 1mg ほどです。ですから、それが種だと言われなければそうとわからないほど小さいものです。あまりに小さくて、セロテープでしおりに貼り付いた「からし種」をイスラエルのおみやげでいただいたことがありましたが、いつの間にか溶けて？消滅していました。それほど小さな「からし種」ですが、それでも地に「それが蒔かれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります」とイエスさまは言われます。実際に、僅か 1mm の種は地に蒔かれるや、ぐんぐん育ってすぐに 2m から 3m にまで成長します。そして、その「大きな枝」の陰には「空の鳥が巣を作れるほど」になると言うのです。

「空の鳥」は、「空の鳥」だからといって 24 時間空を飛んでいるわけではありません。自分のからだを休める「巣」を作ります。そこをねぐらとしながら自由に空を飛び回ります。その際、「巣」は少し高い場所に築けば、地上の敵から身を守ることができて安心です。そして、イエスさまは世界で最も小さい種である「からし種」がそのような存在になると言われます。空を自由に飛び回る「空の鳥」が身を寄せ、ねぐらとしてそこで平安に眠ることができる「巣」を作るほどになると言うのです。

旧約聖書を読むと、この「空の鳥が巣を作る」という表現はアッシリヤやバビロン、エジプトのような最も大きな帝国を言い表すのに用いられていました(エゼキエル 17:22-24, 31:2-9, ダニエル 4:9-12, 21)。イエスさまの念頭には、当然その預言があったと理解できます。それによると、「大きな枝」の下では「野の獣が憩い」、「枝の陰」には「空の鳥」が住んで、「すべての肉なるものはそれに養われた」と言われます。「空の鳥が巣を作る」とは、動物にいのちを与えて生かす、生き生きとした生命力を供給するという表現なのです。日照りの暑さを逃れて外敵から守られることで、平安に生活できます。「それにはすべてのものの食糧があった」ともあるので、枝の葉は家の屋根と壁の役割を果たすのみならず、腹が減ったらそれを食べることのできる食糧の役割を果たしたのでしょう(ダニエル

4:12,21)。しかも「あらゆる種類の鳥が住み着き」と言われます(エゼキエル 17:23,31:6)。「野の獣」についても「野のすべての獣が子を産み」と言われていました(17:6)。

つまり、大きさ僅か1mmの、世界で最も小さな「からし種」なのですが、それが育ち育って、見た目が大きくなるばかりか、世界中に満ちる生きとし生けるすべての生き物を生かす生命力を世界に供給する世界の巨木となる、これが「神の国」だとイエスさまは言われます。世界を生かす「からし種」、これが「神の国」なのです。それは、「地に蒔かれる時には、地に蒔かれる種の中で、一番小さいのですが、それが蒔かれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります」。僅か1mmなのに、大きく育って世界中の生き物を生かす、これは極めて神秘的な事実です。

どうしてこのようなことが可能なのでしょうか。それは、この「からし種」がいのちに満ちているからです。たとえ小さくても生命力に満ちています。だからこそ、「からし種」自身も大きくなり、同時に、世界中の生き物を生かすのでした。これが「神の国」です。「神の国」の直訳は「神の王国」です。神が主権者であり、神がその統治者である王国のことです。神が神として治める王国、それが「神の国」です。「神の国」は、神が全権を握って支配しておられる故に、神のいのちに満ちて、生きとし生けるすべてのものを生かします。

そして、「神の国」の王はイエスさまです。イエスさまは、私たちの身代わりとなって十字架で死んで、私たちの罪を贖ってくださいました。そして、復活して、生きて働いて、私たちのためにとりなし、地獄の滅びから救って「神の国」へと入れてくださいます。このイエスさまの十字架と復活の福音は、世界に満ちるどんな罪人をも救う、力ある、いのちに満ちた「種」です。「種」は「蒔かれて」、すなわち「死んで」初めて大きく成長して実るものですが、同じように、イエスさまの十字架と復活の福音が、死んだ罪人にいのちをもたらします。そして、このイエスさまの支配は、徐々に、しかも確実に拡大していきます。

神の国が「からし種」のように拡大していくというこのたとえの意味は、およそ二通りに理解できると思います。一つは、この世界という歴史理解に於いてです。もう一つは、私個人の人生に於いてです。

まず、この世界に於いて、イエスさまの支配という「神の国」はどのように拡大していったのでしょうか。その始まりは、あの二千年前のベツレヘムでの出来事にあります。イエスさまがお生まれになった時、地上の誰も注目しませんでした。それは、特別に目をこらしてよく見なければ全く見えない、まさに「からし種」のようです。イエスさまは、その後、成人して洗礼を受け、公生涯に入って弟子たちを引き連れて伝道することになりますが、その伝道の拠点はガリラヤでした。大国に挟まれたパレスチナにあるイスラエルの中でも、中心から大きく外れた、日本で言えば東北や北海道のような田舎です。しかも、イエスさま御自身も田舎者の石工労働者でしたが、引き連れて歩く弟子たちもまた田舎者で律法に無学な漁師、さらには後ろ指を指される取税人たちでした。でも、一見「神の国」からほど遠い人たちの集まりが教会でしたが、彼らによって始められた福音宣教は、イスラエルと小アジア、ローマ帝国とヨーロッパ全土、さらにはアフリカ、北南米、アジアの全域、そして今や全世界へと拡大して来ました。イエスさまが言われた通り、「からし種」ほどの「神の国」は全世界に拡大して、多くの人々を生かしてきました。勿論、「キリスト教」の拡大がそのまま「神の国」の前進・拡大というわけではありません。かつてのローマ帝国や大英帝国、アメリカといった、所謂「キリスト教国」は、キリストの名によって多くの戦火や害悪を世界にまき散らしてきました。小さいながら日本のキリスト教会も、戦時下には嘘偽りの悪魔的偽預言をして、世界に害悪をまき散らしました。ですから、「キリスト教=神の国」というわけでは全然ありません。でも、一方では、イエスさまの教えを忠実に守る者もそれぞれの時代にいました。その教えを、戦いながら、あるいは改革しながら、主に選ばれた者たちが固く守って、二千年間教え続けてきたこともまた事実です。彼らは、主の教えを聞き、自分たちが遣わされていく国々でそれを伝えて、それぞれの分野で忠実に守り行います。そして、彼らが主の教えの通

りに社会を変革する場合があります。あるいは、彼らの教える主の教えの通りに、異邦の国もキリスト教国も神にさばかれ、傲慢を打ち砕かれます。こうして、人ではなく神が世界を支配しておられることが明らかにされ、歴史に神の栄光があらわれてきました。そして、歴史の終わりには、イエスさまが再びこの世に再臨し、神に敵対する悪魔とそれに組する勢力を完全に滅ぼすことで、イエスさまの治める「神の国」は遂に完成します。

一方、「神の国」は私の中にも「からし種」のように拡大して行きます。イエスさまのことは初めは全く関心がありません。私の人生の中ではイエスさまの存在はあまりに小さいのです。イエスさまの十字架と復活が私に永遠のいのちをもたらしてくださったという福音の教理は、若くて、血気盛んで、元気な時には、はっきり言うてもいいような話に思えるものです。でも、年を取り、病気をし、いろいろと危険な目にあったり、苦勞したり、人から裏切られたり、あるいは、神にさばかれて砕かれたり、悩んで苦しくなって死にたくなったりすることで、死と直面する機会が多くなれば、イエスさまの存在はどんどんと私の中で大きくなります。イエスさまが私の身代わりとなって十字架で死んで復活して私が天国に行かれるよう今もとりなしてくださっているという有難い福音のおかげで、私が死んでも地獄でなく天国に行けるという事実は、私の中でますます大きな慰めとなり、励ましとなり、今日を生きる力となります。そして、自分が生きるのみならず、私の家族や友人など隣人を生かす原動力となっていくます。イエスさまに愛されているように隣人を愛するという指針にもなります。こうして、最初は見えるか見えないかという小さな「からし種」ほどの「神の国」は、私の人生の中でどんどんと大きくなって、最後は私の現実のすべてとなります。すなわち、死んで天国に行って、「神の国」そのものの中で永遠に平安に生きることとなります。「からし種」ほどの本当に小さかった「神の国」は、私の人生の現実のすべてとなるのです。こうして、キリストの統治する「神の国」は、敵対するあらゆる妨害と障壁を打ち破って、今日も世界に前進して行きます。

ここで、イエスさまは、こうしろ、ああしろと、指示することはなさいません。こうなるぞ、神の国は前進するぞ、いいか見てろよ、と教えておられるだけです。昨日のように憲法を無視した違法な戦争法案ができて、それでもわたしの王国は前進する、わたしの王国は敗北したように見えても、この「からし種」は必ず大きく前進し、成長し、やがて世界を呑み込む、あるいは、あなたの人生の中で時間が経ち、死に向かうにつれて、わたしの王国は前進する、初めは「からし種」のように小さくても、それがどんどん大きくなって行って、あなたの人生に満ち、呑み込む、それを見ていなさい、イエスさまはそう言われるのです。